

# 民間運営3空港で機能強化着々と

## ■成田・関西で容量増、中部「完全24時間」

成田空港、関西空港、中部空港の民間運営3空港の機能強化に向けた施策が着々と進められている。成田空港は滑走路延伸・新設が計画されている。供用開始は2029年3月末を予定しており、発着容量が拡大する。関西空港は25年夏季スケジュール（25年3月30日～）で、新飛行経路設定により発着容量が約3割増加する。中部空港は27年度に代替滑走路の供用を開始する予定だ。滑走路2本体制のもとで「完全24時間運用」を実現する。空港の受け入れ機能の強化で国際貨物便を含めて、これまで以上に柔軟な路線設定、航空機発着が可能となるなど、利便性が高まる。

成田空港はB滑走路（現行2500メートル）を3500メートルに延伸するとともに、C滑走路（3500メートル）を整備する。時間値（1時間当たりの最大発着回数、現行68回）が98回、年間発着容量（現行30万回）が50万回に拡大する。29年3月末に予定されているC滑走路供用開始以降は、滑走路ごとに異なる運用時間を適用する「スライド運用」が導入される。各滑走路の飛行経路下における「静穏時間」（運用制限時間）は7時間を確保。その上で滑走路の運用時間について、午前7時30分～翌午前零時30分までの「夜間運用の遅番」と、午前5時～午後10時までの「早朝運用の早番」を設定。これを組み合わせることで、空港全体の運用時間を午前5時～翌午前零時30分とする。騒音影響平準化のため、定期的に「遅番」と「早番」を入れ替える。

なお午前零時30分から午前1時までの間は、悪天候などやむを得ない

事態で発着の変更を余儀なくされた航空機を受け入れる「弾力的運用」が適用される。C滑走路供用開始後はすべての滑走路における便数制限も廃止されるなど、路線設定や航空機発着の利便性が向上する。

関西空港は25年夏季スケジュールで発着容量が約3割増加する。年間発着容量（現在は環境影響評価の前提として23万回）が30万回、時間値（現行45回、滑走路処理能力としては46回）が60回となる。主に飛行経路の見直しで実現するもので、航空路誌における新飛行経路の運用開始は3月20日。深夜早朝時間帯に關しては、深夜早朝時間帯用の飛行経路を活用する。時間値などの発着容量は、昼間時間帯と同様の運用となる。関西空港ではスポット増設、旅客ターミナルのリニューアルも行われるなど、受け入れ強化に向けた各種施策が進められている。

2005年2月開港の中部空港は、

年間13万回の発着を可能とするという想定のもとで整備・運用されてきた。代替滑走路（3290メートル）は、現在の平行誘導路の位置に整備される。代替滑走路の整備は、空港の運用（航空機の発着）を継続しながら、現滑走路（3500メートル）の大規模補修を実施することを主眼に置いている。現滑走路の大規模補修完了後は、代替滑走路を2本目の滑走路として運用する。

滑走路2本体制となることで、大規模補修・メンテナンスなどに際して空港の運用を制限する必要がなくなり、「完全24時間運用」が実現する。国際物流基地としての拠点を強化、深夜早朝時間帯に運航されている国際貨物便の運航継続、今後の国際貨物便・旅客便の増便対応などの観点から、利便性が向上する。代替滑走路の整備は24年度の「設計」を経て、25年度に「本格着工」という工程となっている。

コロナ禍から回復して訪日需要が拡大する中で、空の玄関口である空港の機能強化が重要な課題となっている。同時にアジアと北米の結節点としての機能強化を目指す成田空港、インテグレーターハブとしても機能する関西空港や中部空港の利便性向上は、国際物流の観点からも重要な取り組み課題となっている。